

羽文雄文学全集 第十五卷
人禁制 哭壁

丹羽文雄文学全集 第十五卷

女人禁制・哭壁

一九七五年七月八日 第一刷発行

著者 丹羽文雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二一二二・郵便番号 一一二
電話 東京〇三三九四五一一二（大代表）・振替 東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社小島製本所

定価は箱に表示してあります

落丁本・乱丁本はお取り替えいたしません

©丹羽文雄 一九七五年 Printed in Japan

(文1)



目次

女人禁制 7

哭壁 39

煩惱具足 299

天衣無縫 321

創作ノ1ト 403

装幀 辻村益朗
(写真・一九四三年海軍報導班員として
ラバウル近郊コロボの教会堂にて)

丹羽文雄文学全集 第十五卷

女人禁制・哭壁

女人禁制

一

山門をくぐると公園のように人手のかかった樹木、花壇が両側に並んでいて、本堂は奥深くて見えなかった。どこかに飼われた小鳥の鳴き声を聞きつけるのだったが、珍しい鳴き声もまじって聞えた。牡丹芍薬の花園のつきた所に高さ二間の金網に囲まれて孔雀の雌雄がいた。支那製の大水瓶に高価な金魚が泳いでいる。京都風な、どこか料理屋の構えに似た庫裡は、広い境内にふさわしくゆったりとした間取で、銅葺きの長い廊、壁の色艶も数寄を凝らしたものである。空は六月の高さに透青に晴れ上っていた。出し抜けにぎゅっと鳴いて、金網を揺すぶり境内の静寂を破るものがあった。庫裡と墓地の境の空地に飼われた親子三匹の平凡な猿である。猿が鳴くと、隣合せの小舎から山羊が鳴いた。すると境内の樹液の多い空気の中に嗅ぎ慣れぬ強い匂が少時漂うのである。檀徒は山門をくぐり花園の丹精を眺めて、動物達に目を奪われてしまうと、参詣の気持からいつか離れてしまうのだ。庫裡はいつもひと気がなくてひっそりとしているので、動物と植物が際立って感じられ

た。百日紅は葉をつけて枝を張り、牡丹芍薬はぐんぐん伸びる赤い葉で竹籬を隠して、色を鮮かに塗ったような竹藪はいつか鐘楼を隠してしまった。それ程隆法寺の境内は本堂の飾りでなく、庫裡を引き立てるため一木一草動物のすべてが庫裡に向いて化粧をしているように見えた。檀徒は参詣に来る度に懐の豊かな庫裡に向うと何ということなしに反感を覚えるのだが、そんな気分や頭で右に向くと、樹立に蔽われて忘れられている風な四方寄せ棟の本堂が小さく控えていた。

初め隆法寺は市ヶ谷で何代も続いていた寺だが、境内の坪の値上りに売り、荻窪に安い土地を買って引越したものである。同時に院主弁海は一存から寺格を高めるため、廃寺になりかかっている下谷の運輸寺を買収したが、寺格と一緒に幾千の墓石を買い取らねばならず、由緒の深い運輸寺の墓は大抵土葬のが多く、土葬の死骸ぐるみ運ぶ訳にいかない。腐りかけた立棺、臥棺、丸桶、百年二百年前の井戸のようになっている墓の下穴はそのままに埋めて、表面の墓石だけを移した。市ヶ谷の墓地もそのように始末をした。

七百軒の檀徒は市ヶ谷から荻窪の新しい隆法寺を探すのに不案内な土地を歩いて馴染みかねるのだったが、移転した方に近い墓石の行儀よく並んでいる眺望は素晴しかった。広い通路と狭い脇道は定規を当てがったように統制が

ゆき届いているので、何かの設計図に似ていた。その間には樹木が飾りをつけて、動きのない、密度の硬い風景が二町四方に展げていた。

本堂は市ヶ谷から運んで来たものであり、山門は運輸寺のを買ったままであった。本堂は庫裡の三分の一の大きさだが、屋根の亜鉛葺は塗ったような色に雨風に蝕んで、深味のあるいい色合を見せていた。院主弁海は本堂にいる時より庫裡にいる時の方が多く、花壇に立っていたり、孔雀の籠にはいたり、山羊や猿や犬の小舎の世話をしている姿の方が人目に付いて馴れていた。彼は四十に近く、高い頬骨と濃い眉を持って、手当り次第に生きものを飼ってみたい性分が強く、一時は二十四の犬を飼い、上野の犬の会で賞牌を得ると売ってしまうのである。物質的にその抜け目のなさは巧みに操られた武器のようであり、そのためこの土地も次第に坪の値段が騰れば再び売って辺鄙な土地に移るのではないかと噂をされた。

境内には叔父の仙岩と、兄の貞信が別々に住まっていた。仙岩は墓地の六疊一と間きりの家に住んで、毎朝五時になると本堂に上って太鼓を叩くのだが、自分から納所坊主らしく振舞うので、誰も彼がただ一人の叔父であらうとも思わぬ。六十を越していたが、往年アナキストとして活躍した頃の知的な面影はいまだに目の色に残っていた。兄の貞信は門脇の平家で、表向きは犬のブローカーを

やっている。この家は初め弁海が妾のお光のために建てた檜造りの贅沢な離れ家で、人目につかず境内から自由に妾宅通いをしたものである。貞信はいくらか耳が遠かった。妻に死なれてから、犬の面倒をみているか、銃を担いで狩猟に出た。

「うちを出る時だけは銃を担いで門をくぐらないでほしいな。檀家の手前もあるから」

弁海は時々そんな風に兄を咎めるのだったが、同じ言葉をこれまでに度々亡くなった母親の口から貞信は聞いて来たというのも、貞信は市ヶ谷時代の隆法寺を継いでいたころ、解禁期となるとじっとしていられなく、毎日のように銃を担いで山門を出入したものである。

「寺を出る時だけはせめて鉄砲を隠して持っていっておくれよ。世間の手前もあるから」

母親にそう言われて、往きは銃を革袋に入れて持ち出すのだったが、帰りにには雉を十羽も腰にぶらさげたり、兎を三匹も獲って犬を従え、靴音にその日の感情を現して山門をくぐるのであった。殺生禁断、女人禁制の宗旨は本堂に預け捨てにして、雉の丸焼など珍しくなかった。貞信は手ずから羽を雉取り、家族で食べ切れずに門の両脇へも分けてやる。

「わしは坊主に生れたのが間違いだった。猟師の子だよ。人間には生れた時からその人に適った仕事に極っていると

言うのだが、わしなどは大それた生れそこないだったよ」と愚痴るのだ。

檀徒の非難が昂じて来ると、弟の弁海に院主を譲って、今度は大つぱらに犬に擬り出し、それを職業にした。

山門脇の家庭には古くからいる女中のおせんが一切を切り回していたが、彼女は十代から二十五になるまでこの家の性格に馴染んで、婚期を逸したことも忘れた顔であった。おせんの顔は数多くの顔にばらばらに散っている見馴れないが見事な調和を持っていた。

おせんの腹が漸く女湯の人々の目につくようになった時、

「貞信さんの子供だろう」

噂になったが、人々には如何にもそれが自然のように受け取れたけれど、貞信が相変らずおせんを女中のままに捨ててゐるのを眺めると、またそれで自然だという風に腹の膨れて来る女中というくらいに軽蔑の扱い方をするのであった。

おせんには別に隆法寺の女中の仕事もあり、手がすく二百日紅の枝をくぐって境内を小走りに渡るのだった。

女人禁制の庫裡にはお光が商家の細君のように控えて、一日の大部分を上品に上品にと心掛けてゐる風であつたが、檀徒には愛嬌がよいので好意を持たれていた。お光は

ほとんど本堂に上つたことがなく、たまに上ると直ぐ供物の仏壇の菓子を下げて出て来た。終日長火鉢の向うに坐つて、新聞を取るのにも女中を呼んで、裾を長く着たお召は普段着で、寝せているので襟をきちんと合わせてもひとりでに開いて来る。彼女は弁海の二度目の妻であつた。いよいよ隆法寺の庫裡に納まつてしまつと、一種の才能を現して、誰を寺の世話方にしたらいいか、葬式は寺に乘込めば幾ら、こちらから出向く場合は幾らと月刊宗教雑誌に広告を出させたり、墓地の割当も檀家の懐加減で差別を設けて勘定書を作り、七百軒の檀家の財産を暗記した。顔の垢抜けのした、すらりとした身体には糸の太い着物が辛いようであり、いつもある趣味から丸帯を斜に締め、結び目も心持左にずらせ、墓地にはいつて来ると、

「仙岩さん、おせんを呼んで来て頂戴な」

顎の先で言葉を言い、墓地を掃除させるのであつた。敷島をくわえても、唾で濡らして薄紙を破るようなことはしない。裾をはしよって箆に取り纏つてゐるようなおせんの働き振りを見守りながら、腹で、おせんが自分の顔の美しさに少しも気が付いていないのをいい気味に思い、自分もそれには気が付かない顔をするのだったが、こんな点には直ぐに気が向く性質であつた。

「お前もすっかり隆法寺の奥様になつてしまったので、この頃は貴様が付いて来たようだね」

姉のお染は世田谷から毎日隆法寺に通つて来、お光の境遇を言うのだった。

お染の旦那は商売人で、貞信、弁海の父親違いの兄であり、達之助と言つた。風邪をこじらせて一年前に死んでゐるのだが、その頃からお染は風の日も雨の日も極つた時間には隆法寺の山門をくぐるようになっていた。お染の生活は隆法寺の山門をくぐるため特に許されているように規則正しかった。午前十一時になると、お染は山門にはいつて来るので、見掛ける門前のそば屋、魚屋、八百屋の人々は、

「もう十一時だな」と判るのである。

妹に似て瘦せて背が高く、お染は三つ年上だった。彼女は極つた時間に寺に来ると昼食を作り、夜まで居て、必ず世田谷に帰つた。世田谷には稲荷を祀つてゐるので、その勤めがあるからと言ひ、世田谷でゐる金は家賃と隆法寺通いの省線の金だけで足りるようであつた。お染も隆法寺の本堂には余り注意は向かない方であつた。

お染が来ると、毎日のことながら庫裡はその日一日の幕が揚がつて始まるようで、すべてのものが普段の調子に息づいて、弁海は窓硝子越しに見挙げる空が鮮かだなど思うのだった。十二畳の彼の部屋にはお染用の座布団が敷かれ、貝をちりばめた支那の丸卓子に弁海の手で薄茶がたてられた。弁海はお染と向き合つてゐると、顔がひとりで

崩れて来るのだった。目の前の品のある顔は静かに微笑んでいて、ある心持はあるなと彼には思われた。肉の薄い、個々の造作が柔かにわずかに浮き上つた顔をお染は持つてゐるのだが、頸のしなやかな感じが目立つのである。

ある日、お染は隆法寺に來なかつた。すると十一時から一時間が過ぎる度に弁海の状態は次第に苛立つて来て、病氣になった風に刺々しくお光にも当り散らすのであつたが、その様子は夜の明け切らぬのを待ちかねて癪癪を起す子供のようにあつた。姉が来ないからだとお光の氣が付いたのは夜にはいつてからであり、仙岩がお光の命を受けて世田谷へ行つた。

「あなたはあたしより姉さんの方が好きなんでしょう？」

そう言つてしまうと、自分の言葉にどきんとしてしまふのであつた。氣が付かぬ内や口に出さない間はそうした謀叛が計画されていても知らない顔で押し通すことも出来るのだけれど、口に出してしまへば、夫婦の間に一つの溝が出来たのも同じで、お光はこの目で溝と向き合ねばならず、こんなことはお染の旦那の達之助が生きてゐる頃には一度もなかった。すると弁海、何かを思い通りに往かせるといふ子供っぽい顔付はお染が来ない内は却々直らないように見えた。

夜遅く、自動車庫裡に横づけになつた。車の地響きは少し耳の遠い貞信の耳にもはいるので、おせんをかえり見

て、

「誰か死んだのだな。どうせまた仙岩が枕経を上げに出かけるのだろう」

そう言っていると、隆法寺の庫裡の方で俄に人の喚く声と物がぶつかって硝子の割れる音が続いて聞えた。物音で庭の犬が吠え立て狼が鳴き出すので、境内の植物までが眠りを醒されて変にざわめくようであった。

貞信が寝巻姿で様子を見に境内を歩いて行ったが、轆^{ろく}て同じ樹立の薄暗から顔は戻って来たが、眉を顰^{しか}めてい、「弁海の奴、いい加減にしたらいいんだ。とんだ痴話喧嘩さ。お光の奴が乱暴をしているんだよ。ひどいヒステリーだ。お染が駆けつけて来ていたよ」

「今日はお染さん、お寺へみえなかったようでございますわ」おせんは怯えている目で応えて、膝の上に生れて間もない赤ん坊を抱いていた。

お染の来ない日があると、弁海は大っぴらに不機嫌をぶち撒けるので、お光は蒼くなって抵抗するのだったが、極って仙岩が世田谷へ使いに行くのである。そんな時、院主に叱りつけられるおせんは駈^かれもののような顔をして、広い境内のどこにも行き場がない風にうろろとした。眺めて、仙岩の心持の上にはおせんの寂しく弱々しいさまが滲み残るのだった。弁海が変に苛立っているような日には、犬や猿や山羊や鳥までが妙に殺気立って、啼き声も違

って聞えた。然しその間にも、自分というものを少しも持たず、弁海の感情をまるで貞信の感情のように聞いて拉^ひがれてしまうおせんがこの境内に在るということは、何かこの隆法寺にとって都合のいい優しい申訳が立っているように思われた。仙岩はおせんを眺めていると、いつもいい気になって勝手な発見をするのだったが、それはおせんの無力さに原因していた。彼女の無力な自分を何とか理屈をつけて褒め上げようという心掛けで、いっそうおせんの無力が甚しく映るのだけれど、人々はおせんの素直な性質の上には自分の心を映したり消したり、何気なくそれが出来るのであった。

然し、騒ぎのない夜の隆法寺は奥深い樹立のせいで幽邃な気分になり、じっと耳を澄ませると何かが息づいている、墓石が息づいているような衝動が感じられた。幅のある静寂な空気は仙岩の暗い一室での寝返りの音も聞きつけて、響いて渡った。そういう時、隆法寺は女氣から遠く、不動の清いもので包まれていた。

二

貞信と弁海の犬気違いには死んだ義兄達之助の影響が多かったというのも、達之助は日本畜犬協会の評議員であった。上野に犬の会が催されると、兄弟はどちらのマニアが甚しいか試し合う思いで上野に詰めかけ、日本料理相模屋

を足溜りにしてしばしば義兄とも逢った。

相模屋には数人の女中がいた。特にお染とお光の姉妹が目立っている、弁海はお染に心を惹かれて、惹かれていく運に稍々積極的に乗り出してみると、すでに達之助の世話を受けていることが判った。妹のお光は女の方から弁海に近付いて、彼が行くと、身のまわり一切を世話女房の心意気で尽して見せるのだが、姉に向って競う心持からであった。弁海は近寄って来る渦巻に半ば本意ながら巻き込まれていく思いで、隆法寺脇にお光の平家を建てた。

お光に男の子が生まれたとき、弁海の子供のない正妻は一言も非難しないのであった。弁海は妻の温良な性格を押しつけていることに気遅れを感じていたのだが、お光は子供を抱いて隆法寺の境内を歩き回り、弁海が白衣姿で牡丹の芽を摘んでいると、狎れ狎れしく傍に寄りそって並ぶのである。そんな時正妻が来かかると、はっとして妻の方で気付かぬように引き返すのだったが、お光はこの狎れ狎れしい素振りを見る人の目に一と目でも多く、自分と弁海の關係を渗み込ませる計算を持っている風に見えた。正妻の方では一途に押されて、押されるままになっていた。

そんな有様を、「何事もお稲荷さまがいよいよにして下さいますわ」とお染は漠然と弁海に言うのであった。「あたしが義兄さんの世話を受けていましたのも、妹がこうしてあなたの世話を受けていますのも、みんなお稲荷さま

の御利益にちがいありませんわ」

狂信者の顔付を見せるのだが、その目がある時にはふつとゆるむことがあり、間のびした目の光りになると、お染は変に抜け目のない、ただの女のように見えた。——果して稲荷の利益かどうか、達之助は子供もある先妻を追いつくような結果になった。先妻は縊死し、子供が行方不明になったと知らされた時、お染はぎょっとして、自分の祈りの中にはそんな言葉が含まれていたような気持がするもので、その当座気分が執拗く鬱したものである。然し、肝心の達之助がさようなことを忘れすにしているのを眺めると、お染もこれは確に何かのおかげであるという気持が次第に持てるのだった。達之助が死んだ時、彼女はそれほど驚きも慌てもしなかった。死も何かのせいのように思われて、その後毎日のように隆法寺に出入が出来るようになってみると、これも矢張り稲荷のせいだと考えられるのであった。

「お光の上にも早く安心の出来る日の来ますようにと、あたしは一心にお祈り申しておりますのよ」

弁海は困って、お染の言葉に副う殊勝な顔をするのだが、心持は何か中途半端であった。相模屋時代から引き続いて持っているお染に対する本心は隠して、今は月々稲荷の維持費に幾らかのお金がお染の懐にはいっていき、そうして義理と人情が積み重っていく、その堆積のどきどきす